

文 學 論 集

近代への疑惑

中 村 光 夫

1 9 4 7

穂高書房

文 學 論 集

近代への疑惑

中 村 光 夫 著



1 9 4 7

穗 高 書 房

近代への疑惑

中村光夫著

昭和二十二年七月二十日發行

定價 60 圓

發行者 小坂久馬

東京都千代田區九段二ノ十七(九段ビル)

印刷者 沼知悦次郎

東京都新宿區市ヶ谷加賀町一ノ十二

印刷所 大日本印刷株式會社

東京都新宿區市ヶ谷加賀町一ノ十二

發行所 株式會社穗高書房

東京都千代田區九段二ノ十七(九段ビル)

電話 九段(33)二二六五番

日本出版協會會員 A 二〇八〇九一

目次

「近代」への疑惑	五
私小説について	二一
文學の框	九一
自然主義について	一〇六
現代文學について	一二三
文學傳統について	一三四
外國文學の鑑賞	一四六
影　　響　　論	一六〇
現代文化の心理	二〇〇
技巧の羞恥	二一四
知識と信念	二三三
後　　記	二四七

文學論集

「近代」への疑惑

「近代」への疑惑

「近代の超克」——この課題には何となく僕等に解つたやうな解らぬやうな曖昧なところがあるのではなからうか。それが概念として意味するところは大概呑込めるにしても、この言葉が僕等にとつてどういふ現實的な意味を持つか。云ひかへればその内容が僕等の實際の反省とどういふ點で繋るのか、かういふ疑問はこの——少くも我國では——耳馴れぬ新語を一瞥したとき、おそらく誰の胸にも湧くのではなからうか。

これまで我國で普通に考へられてゐたやうに近代的といふ言葉を西洋的といふ意味と同一視し、西歐の没落と日本の自覺といふ風に問題を樹てれば事は簡單である。しかしもしさういふ粗雑な概念で事を済ますつもりならば何もかうした新語を持ち出すに當らぬ筈である。西洋を否定するに西洋の概念を借りてくるのなどはそれ自身すでに不見識な矛盾であらう。現代文化の課題を「近代の超克」といふ言葉で表現したのは、ほかならぬ現代西歐の一部の思想家達だからである。

とにかく僕に一番氣にかかるのはこの課題の持つ強い觀念性である。云ひかへればこの「近代の超克」といふ言葉が、おそらく現代ヨーロッパ人に響いたに違ひない強い實感と明瞭な内容をもつて僕等の胸に響くかといふことである。

ヨーロッパにおいて所謂近代精神の萌芽が最初に明瞭に形造られたのをルネッサンス時代とすれば、それは十九世紀の爛熟にいたるまで少くも五世紀を経てゐる。そして所謂近代史の特色をなす、多くの文化現象は、宗教改革にしろ、フランス革命にしろ、または産業革命にせよ、すべて彼等に固有の精神の性向の所産であり、いはゞそれらはいづれも彼等にとつては巨大な社會的規模で行はれたひとつの人間精神の實驗であり、その結果はたとへ如何様なものであらうと、彼等にとつては本當の意味で自分のものである。したがつて彼等は近代の歸結から、どのやうに苦い幻滅を味ははうと、その近代といふ時代を實際に生き抜いて來たといふ事實に疑ひはないわけである。彼等が近代といふ人間精神上の或る秩序（または無秩序）を否定するとき、それは彼等自らがその秩序（または無秩序）を果てまで生きて見たといふ確信を前提としてゐる。彼等がもはや近代からは何も期待し得ぬといふとき、彼等の絶望はその對象についておよそ試み得るすべてのことをやり抜いて來たといふ自信と隣り合はせな筈である。

ところで翻つて考へれば、僕等は「近代」といふものに對してかういふいはゞ生活そのものに根ざした健康な絶望乃至は自信を持ち得るであらうか。近代とは僕等の精神にそれほど手應への

ある實驗であつたであらうか。少くも僕はかうした疑問についてまづ考へざるを得ないのである。

●江戸時代を一種獨特な近代社會と考へれば格別、明治以後における我國の所謂近代文化現象のすべてに通ずる特色はまづ何より底の浅い借物であつたといふ點ではなからうか。明治以後の我國は西洋の影響によつて近代化したとは、多くの歴史家の説く常識である。だがこの所謂近代とはそれが外國からの慌しい移植であるといふ點ですでにヨーロッパのそれとは全く性格を異にする筈である。いはゞ近代とはヨーロッパにおいては少くも國產品であつたに對し、我國ではまづ何より輸入品であつた。そしてこの輸入品としての性格が我國の「近代」のもつとも大きな特色をなして來たのではなからうか。我國において明治以來慌しく生起した雑多な近代文化現象はすべてその内容において觀念的であり、社會的影響の點では表面的に止まつたのではないか。そしてこのことが僕等にとつて弱點であるかまた強味であるかといふ問題はしばらく措き、ともかくここに我國の所謂近代文化のすべてに通ずる一番の特色があるとすれば、かうした我國に獨自な「近代」の性格を無視して「近代の超克」を語るのは、少くも僕等にとつて無意味な觀念的遊戲にすぎまい。すでに我國においては「近代」そのものが輸入品である以上この問題は一般に輸入文化の問題を離れてあり得ない。更に具體的に云へば、僕等は明治以來西洋の文化をどのやうな形で受け入れて來たか。この激しい外來文明の移入によつて、單に僕等の生活のみでなく、僕等

の精神がどういふ變化を蒙つて來たか。ここに少くも僕等の實際に反省すべき課題があるのではなからうか。たとへこの複雑な難問の解決が僕等の手に餘るものであらうとも。

何故ならこれこそ世界中でまさしく僕等にしか起らなかつた事件であり、また僕等の實際に生きてゐる問題だからである。

西洋文明の我國にもたらした功罪は今八釜しく論じられてゐる問題である。そして、かつて淺薄な西洋崇拜論が横行してゐるやうに、現在では安易な西洋否定論が俗耳には受けてゐるやうである。しかも、明治以來我國が西洋から蒙つた影響といふ問題は單にこれを口先で否定してしまへばすむやうな、生易しい事柄なのであらうか。それは或る意味で僕等の生活様式の根柢にまで深く食ひ込んでゐる。西洋の影響は今日まで最早僕等の日常茶飯事の間に見出されるのである。

たとへば今僕は雷燈の下で萬年筆を使つてゐるが、この二つは考へて見れば西洋から這入つて來たものである。また洋服とか靴などは云ふまでもなく、今日の和服を仕立てる布地などもスフヤ人絹は勿論、機械の綿布や絹はこれを自由に彩色する染料とともに西洋の技術で造られたものであらう。

かう考へて來ると、僕等が平素何氣なく使つてゐる多くの品物のなかで、その着想、材料、製造の工程などのいづれかのうちで西洋の影響を蒙らぬものを見出すのが却つて困難なほどである。單に品物だけではない。今年は特に盛んであつたと云はれる海水浴なども、それがひとつの風

俗となつたのは西洋の影響だと云つてよい。若い娘が海水着ひとつで砂濱を闊歩するなどといふ風俗はとにかく昔の日本にはなかつたことである。

その他今では僕等の社會生活に不可缺な要素となつてゐる電車、汽車、自動車、または電信電話郵便などはいづれも西洋から輸入品である。更に氣付いて見れば僕等が平素出し入れしてゐる小錢の形まで、紙幣の兌換制度に伴つて西洋からとり入れられたものであつた。

かう書くと或る人々は云ふであらう。成程これらの物は始めは西洋から輸入されたに違ひないが、今ではそれは人々が西洋のものだなどと思はぬほど日本化してしまつてゐる。すでに國民が十分それに親しんでゐる以上、今更その身許を洗ふ必要はないではないか、と。

だが僕は反對にかう考へる。今日僕等がそれを西洋のものと氣付かぬのは、それだけ西洋の影響が深く僕等の生活に浸み透つてゐるからだ。現代の社會生活が汽車や郵便や電話などなしに考へられぬのは、つまり僕等の生活がこれらの事物によつて或る根本的な變化を蒙つたことの證左ではなからうか。

とまれ現代日本人の生活はその風俗においても、政治經濟の上でも、または文化の領域でも、ほとんど明治以前の倂を止めぬと云つてよい。そしてこの驚くべき生活様式の革命が、維新の開國以來わづか八十年、長命な人の一生にも當らぬ短い期間に成就されたといふことに我國の所謂「近代」の最も著るしい特色があるのではなからうか。世界中のどこの國が何時の時代にこのや

うに激しくまた慌しい變化を経験したであらうか。この點でそれは西洋の影響によつて起つたものであるにしろ西洋自身にも類例のない變化であつた。西洋が西洋を模倣して變化する筈はない。そして近代とはさきに述べたやうにすべて彼等自身の精神の胎内から生れたものであつた。

むろんかうした外國文明の急速な吸収は明治以來の我國の生存上の必要事であつた。そして今日の我國の國運は少くも僕等の先人がこのために費した努力を無視しては考へられぬものであらう。西歐文明の巧みな採用による我國の急速な擡頭は自負心の強いヨーロッパ人自身が奇蹟と呼んで稱讃するに躊躇しないところである。

「歐米先進國」の「富强」を我國に移植することを願つた明治時代の先覺者達も、おそらく彼等の理想がこれほど速かに達成されるとは思ひもかけなかつたであらう。

だがこの「奇蹟」は果してその背後にどれだけの犠牲を拂つて得られたか。この必要によつて強制された急激な生活様式の變轉が僕等の精神をどのやうな混亂に導いたか、いはばかうした無慈悲な時代の要求は、それに已むを得ず適合して生きた精神をどのやうに歪めたか。おそらくここに我國の「近代」が僕等に提出するもつとも切實な問題があるのではなからうか。

これまで我國において近代的といふ言葉は大體西洋的といふのと同じ意味に用ひられて來た。そしてこの曖昧な社會通念が、なほ僕等の意識を根強く支配してゐるのは、それが大體次のやう

な二つの事實を根據とするためであらう。

そのひとつは我國においては「近代」と見られる文化現象はすべて西洋からの移入品であつたといふことであり、いまひとつは僕等が「西洋」のうちにただ「近代」をしか見なかつたといふことである。云ふまでもなく近代性は現代ヨーロッパ文化の著るしい特色であるにしろ、それは結局文化の一樣相であつて、そのすべてではない。日本が長い歴史を持つやうに、ヨーロッパの諸國はいづれも古い國である。ソクラテスは孔子と大體同時代の人であり、西歐の思想の歴史は東洋と同じく古いのである。そしてこの悠久な傳統はおそらく儒教の感化が僕等におけると同様に、現代ヨーロッパ文化の血液に脈々と流れてゐる。ギリシャにせよ、ローマにせよ、またはキリスト教にせよ、遠い過去において西歐の形成に役立つた諸要素はいづれも現代におけるヨーロッパ人の精神を型造る生きた實體である。

ではこの單純な事實が何故我國では一般に常識化され難いのであるか。「西歐」を「近代」の同義語と見る淺薄な謬見が、何故人々の心に根強く巢食つてゐるのであるか。

たとへば文化の領域においても、僕等は何故ヨーロッパについてその古さも理解せず、その所謂新しさを追ふ狂態を繰り返して來たのであるか。今日僕等の常識化したヨーロッパ觀に、何故かういふ重大な遠近法の誤差が生じたのであらうか。

この原因を究めるためには、僕等は明治以來所謂西洋文明をいかなる形で受入れて來たかにつ

いて振り返つて見る必要があらう。

およそ或る國の文化が外國文化の急激な流入乃至は感化を蒙るのは、大體二つの場合に分けて考へられるであらう。ひとつはその國が外國から征服されたとき、他は逆に外國を征服したときとである。そして明治以來の我國の西洋文化の輸入がいづれに近い條件の下に行はれたかと云へば、おそらく前者に近かつたのではなからうか。

さきに述べたやうに開國當初の我國にとつて歐米文明の輸入は死活の問題であつたが、外國文化攝取の問題がこのやうに切迫詰つた形で國民の前に提出されたことこそ、當時の我國の存立そのものが如何に深い危機に臨んでゐたかを端的に語るものであらう。幕末の我國に開國を促した直接の動機は「黒船」の威嚇であつた。そしてこの西洋の壓迫に對峙して國家としての生存を全うするためにまづ武力や經濟力の點で彼等に對等の力を持つのが何よりの急務とされた。

明治時代の西洋文明の輸入はすべてこの根本的必要の線に沿つて行はれた。すなはち我國民が西洋からまづ學び取つたものは大砲であり、蒸汽船であり、汽車であり、紡織機であり、更にこれを運轉するための工場であり、銀行であり會社であつた。いはゞ當時の西歐はあたかも十九世紀後半に實用化された科學文明によつて我國民を威嚇し眩惑した。當時の西洋文明の移入とは極言すればその根本において機械の輸入とこれを運轉する技術の習得にすぎなかつた。そして恰も

人々に魔術めいて映つた目新しい數々の科學的技術の所産は、その優秀な實用性によつて、否應なく國民の生活様式の革命を促した。行燈はランプに驅逐され、ランプはまた瓦斯燈によつて代られた。當時の人々にとつて西洋文明とはまづ何より、機械とこれを運用するに適した社會の謂であつた。當時の識者が我國の現状を「歐米先進國」に比して遠く及ばぬと感じたのはまさにこの點においてであつた。そしてかうした西洋觀は其時代の我國が國家としての生存上急速に満たす必要のあつた缺陷を補ふ上には適切なものであつたに違ひないにしろ、それ自身として見れば淺薄であり、また一面的であることを免れなかつた。

むろん當時にあつても西洋文明について單にその「外形」のみを理解するに止まらず、その「精神」も理解すべしといふ議論は盛んに行はれた。しかし當時の人々の興味を惹いた西歐の「精神」とは主としてその「富強」を生む原因としての「人民獨立の氣象」であり、または近代産業の生育に適合した政治組織の觀念にすぎなかつた。

いはゞ明治時代の我國民は（少數の先覺者を別とすれば）すべて「科學文明——物質文化——即西洋」といふ一種の偏光ブリズムを通してヨーロッパを見た。このブリズムを仕掛けたものは國家の必要であつた。したがつてかうした強大な現實的根據を持つ西洋觀がその一面性に拘らず——或ひはまさにその一面性のゆゑに——ひとつの絶大な力を持つ社會的風潮を生む母胎となつたのはもとより當然のことであつた。西歐のいはゆる物質文明の疑ひ得ぬ優秀性はそのまゝ他の

文化のあらゆる部門においても西洋への輕信を生んだ。そしてこの輕信はその對象への理解が淺薄であつたに比例して熱烈なものであつた。こゝに生れた所謂文明開化の風潮は、單に世相として見れば今日ではすでに過去の出來事であるが、それが我國民の精神に植ゑつけた一種抜き難い偏向は、現代の僕等の周圍にもなほ感ぜられるのではなからうか。

さきに僕は西歐文化の移人は明治開國當初の我國にとつて死活問題であり、さうした課題を我國に強ひたのは、當時の西歐科學文明の優秀な實用性であつたと書いたが、この二つは結局同じことである。何故なら、もし或る國の文化がその實用性において壓倒的に他より優れてゐなかつたら、その文化の輸入が他國にとつて生存上の必要となる筈はないからである。

この意味においても明治時代の西洋文化輸入が實用化された科學文明を主流としたのはもとより當然の成行であつた。だが國內に鐵道が開け、海上には汽船の便が生れ、電線が野山を横斷し、ランプが瓦斯燈から電燈に變り、鐵道馬車に變つて市街を電車が走るといつたやうな現象は、當時の人々が考へたやうに單純に「文明」と信じてよいのであらうか。それは僕等の生活にとつてひとつの變化であるにしろ、人間生活の「進歩」と見てよいのであらうか。更に具體的に云へばかうした實用品の輸入によつて僕等はヨーロッパから科學をとり入れたと考へてよいのであらうか。